

## 米国婦人宣教師による フレーベル主義教育の導入

酒 井 玲 子

はじめに 一問題の所在一

I. 婦人宣教師の教育活動

II. A.L. ハウによるフレーベル主義教育の導入

III. J.K.U. のフレーベル教育の導入

ま と め 一宣教と教育の役割一

### はじめに 一問題の所在一

明治期にはフレーベル (Friedrich A. Fröbel) の教育思想や理論よりも遊具一恩物教育法が我が国のフレーベル主義教育導入の中心にあったと言われている。

しかし、桑田親吾の『幼稚園』(1872、明治5)、近藤真琴の『子育ての巻』(1875、明治8)以来、フレーベル関係書は我が国で多数出版されているし、また米国経由で導入された英文のフレーベル人物伝や教育論の紹介書、翻訳本も決して少なくない。にもかかわらず形式主義的な恩物教育法が最初の官立東京女子師範付属幼稚園(1876、明治9)の実践を初めとして、我が国の幼稚園界を風靡していたことは事実である。

それに対して米国等の婦人宣教師達は最初から教育方法や技術とともにフレーベル教育の「真髄」としてその思想や理論を我が国に熱心に紹介した。

本稿では、なぜ彼女達が日本人に先駆けてフレーベル主義教育を比較的トータルに把握し導入し得たのか、そして明治、大正、昭和期にかけてその教育の普及と研究の前進に貢献し得たのかを問題にしたい。

仮説としては彼女達のキリスト教教育の理解をフレーベルの教育観、すなわち児童への神性啓培や生の合一思想に合致させ、それをキリスト

教幼児保育論として意識的に追求したのではないかと考える。

キリスト教伝道とフレーベル主義教育の普及活動とが手を携えて展開されたと考える。ここではそれを考察するために、神戸の頌栄保母傳習所と付属幼稚園の設立者アニー・ライオン・ハウ (Anie Lion Howe) の出版物を主として対象としたい。その際、水野浩志、高野勝夫、西垣光代等の各氏における先駆的で精力的な A.L. ハウ研究の成果を基調とした。第二に、ハウ達婦人宣教師を中心に設立された J.K.U. (Japan Kindergarten Union) の活動年報 (Annual Report) から、彼女達のフレーベル主義教育の理解を探ってみたい。その前提として、札幌と小樽での婦人宣教師の足跡を見ることから始めたい。

## 1. 婦人宣教師の教育活動

### — スミス、ローズを中心に —

#### (1) 北海道での伝道、教育

明治学院理事長の J・W・ノックス (George W. Knox) は、その米国婦人宣教師や女教師達の活躍した時代の特徴を次のように記している。1876 年頃から、すなわち明治 10 年代は福音伝道を目的とした学校運営が各地で発展した。続く明治 20 年代以降は国粹主義の起こりと平行して、教会や学校が外国人宣教師の管理下から日本人クリスチャンに移行しつつあり、そこでは福音よりも「国民の知的、教育的進歩の追求」が疑問の余地のない課題である。逆上<sup>(1)</sup>って考えると米国では 19 世紀前半に西部への開拓スピリットと相俟って信仰覚醒運動が起こり、青年が世界宣教に乗り出した時期である。1810 年にはプロテスタント各教会が超教派で伝道協会 (American Board of Commissioners for Foreign Missions、以下ミッションボード) を結成し、海外へと布教活動を開始したのである。1827 年にその宣教のモットーとして、世界の道徳の革新、戦争の停止と平和の実現、全世界の各国の聖別、あらゆる村に学校と教会の建設、家庭に聖書と祈りと神の幕屋の建設すること、を確認したのである (第 18 回年会記録)。

端的に言へば、キリスト教信仰に燃えた、当時では数少ない高等教育を受けた米国中流家庭の女性達はその情熱や意欲を男性と対等に活路を

見いだせる場、すなわちそれが海外宣教活動であったと言われている<sup>(2)</sup>。実際、当初彼女達は家庭と地域社会の浄化にエネルギーを注いでいたが、南北戦争後は召命感を抱いて社会的、職業的活動を海外へと拡大していくのである。

神戸の A.L. ハウは、こうした宣教運動の波の中で、その使命の適任者とは、鍛練された心身の持ち主、キリスト者として認められる人格、自分たちの教えを注意深く相手に合わせることで、「神の国の進歩に貢献」する人物である、と記している<sup>(3)</sup>。

さて、日本に送られた婦人宣教師達は国粹主義の波に翻弄され、苦闘しつつ、その教育事業の地歩を固め、近代日本の黎明期に我が国の教育と文化、精神生活に多大な足跡を遺したのである。

北海道の僻地伝道に生涯をかけたピアソン (George P. Pierson) は独身の婦人宣教師の役割が、日本婦人の家庭管理と魂の援助、すなわち「天国を雛型」化を目指す家庭や学校形成にあり、その活動量は男性宣教師の四倍にもものぼると指摘している<sup>(4)</sup>。

このように言われる婦人宣教師達は、女子や幼児の教育、保育者養成機関が日本社会では等閑視され、あるいは遅滞している実態に着目した。彼女達はまずクリスチャンホームを形成すべく女子教育と人間形成の基礎期である幼児に強烈な教育的使命を抱いたのである。

## (2) スミスの教育活動

こうした婦人宣教師のうち、志を貫き北辺の地札幌で独力で女学校を開設したサラ・C・スミス (Sarah C. Smith) はその実例と言えよう。彼女はミッションボードの「実現しないかも知れぬ無謀な考え<sup>(5)</sup>」との反対を押し切って 1887 (明治 20) 年に女学校をスタートさせた。最初は師範学校の英語教師を勤める傍ら、官、財、学界の援助を受け、2 年後にはスミス女学校の認可とミッションボードの資金をも得て運営を軌道に乗せたのである。この背後には当時の札幌が「女学校を待望する<sup>(6)</sup>」状況にあり、それがタイムリーに功を奏したとも言える。しかし富国強兵策と教育勅語の浸透化、特に 1899 (明治 31) 年の私立学校令と文部省訓令 12 号下における逆風は、キリスト教学校とスミスやモンク校長 (Alice M. Monk) 等、外国人宣教師には苛酷な試練の時代であった。しかし、北星

女学校 (1894 年改名) は彼女達の粉骨碎身の努力で北星は学校としての地歩を固めたのである。

スマスは「校務年誌」に、学校の目的を「役立つ知識」“useful knowledge”と「宗教的霊的影響」“religious and spiritual influence”をあげているが、一方、他のアメリカ婦人宣教師と同様に、「未来の母親」とクリスチャンホーム形成者の育成をも目指していた。

スマスは女学校の開設と同時にそこに幼稚園を付設したが、これは札幌の最初の幼稚園でもあった。

スマスの幼稚園教育の状況は定かではないが、時の新聞が「幼稚園教師長谷部嬢児童を引率して西洋及び日本の頌歌と遊戯をなさしめたるに諸言最も興に入りたる由」とか、「スマス女学校幼稚園生徒なる岩井まさじの英語暗礁は発音正しく音調流朗にして聴者を動か<sup>(8)</sup>し」等の賛辞を記している。この「長谷部嬢」とは、1887 (明治 20) 年東京の桜井女学校付設幼稚保育科第一期生の長谷部万のことで、彼女はスマスの幼稚園開園と同時に赴任している。

桜井女学校は 1880 (明治 13) 年に幼稚保育科を設置し、日本で最初のプロテスタント系幼稚園を開園したが、スマスが最初に赴任した新栄女学校とは姉妹関係にあった (両校は 1890 年に合併して女子学院)。その年に提出された桜井女学校附属幼稚園の開業届には、「幼稚園規則」の項に次のような保育科目が設定されていた。

それには、第一物品科、第二美麗科、第三知識科の内容がそれぞれ提示されており、併せて「右三科中包蔵ス細目左ノ如シ」として以下のような項目が上げられている。

「六球法 三体法 立方体甲乙 長方体甲乙 三角罫 置環法 図画法 刺紙法 繡紙法

剪紙法 織紙法 組板方 連板法 組紙法 豆工法 模型法 博物物理物

体教科、計算、鎖練法」 外唱歌 遊戯 説話 体操<sup>(9)</sup>」

さらにこれに併記されている内容を見ると、六球法、立方体、長方体の使用など概ね文部通達四号に規定された内容に沿っている。それは当時の官立東京女子師範学校付設幼稚園などの保育項目にフレーザーの遊具 (恩物) が含まれているのと同様である。実際最初は、その師範学校

の教師によってフレーベル恩物が教えられ、雅楽調の歌が唱われ遊戯がなされたという。ところが、開設3年後に幼児教育の専門家であるミリケン (Elizabeth P. Milliken) を園長に迎えると次第に養成課程は充実して来た。フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』を英語で歌ったり、それまでとは違う幼児に親しみ易いリズムミカルなものが指導された。スミスはこのミリケンと親交があり、長谷部については、「ミス長谷部を見れば、ミス・ミリケンの幼稚園教諭としての教育の立派さがわかります。彼女は大成です<sup>(10)</sup>」と称賛している。このミリケンは、アルデニー教員養成所で幼稚園教員の資格を取り、婦人宣教師として来日したものである。

このミリケンから伝授された保育内容をスミスの幼稚園において長谷部や富田さん、高野愛らが導入し実践したのである。この園は7年間で204人の園児を抱え、一般からも評価を得たが、1894(明治27)年に移転した校舎が生徒増で狭隘となり、財政難も相俟ってこれを閉鎖してしまった。この志は3年後に小樽ローズ幼稚園、札幌の桑園幼稚園(1923、大正12)、その後戦前では北星女学校保育専攻科(1935昭和10)等に引き継がれたのである。

### (3)小樽静修女学校とローズ幼稚園

1894年、女学校運営に疲労困憊してスミスに懇願され、彼女を支援するべく北星に赴任したのはスミスと同郷のクララ・H・ローズ (Clara H. Rose)であった。彼女はそれ以前に約7年間桜井女学校(後女子学院)に勤務した後北星に赴任してきた。しかし北星には定着せず、翌年には私財を投じて小樽に静修女学校を開設したのである。

当時小樽は国際貿易港に指定され、金融機関の欧風建築物が林立し、繁栄の一途を辿っていたが、ローズはこの発展する商業都市小樽が文化や教養面で貧困であり、未就学女子が多く、交易港特有の道徳的頹廃に無関心ではいられなかった。こうした小樽の裏面を知り他の宣教師同様、彼女はより困難な地に自己の宣教と教育の使命を抱いたのである。ピアソン宣教師夫妻と小樽教会の光小太郎牧師、そして小樽の各界人士がローズの意志を汲んでその活動を支援した。その結果、草創期に40名もの生徒を抱え、ローズをして「我々の学校があまりに急速に伸び過ぎているという不満が起こらないように願っています<sup>(12)</sup>」、と言わしめる程上首

尾に運んだのである。

1893(明治 30)年、ロースはこの女学校に幼稚園を付設したが、これはスミスの幼稚園を閉鎖した 3 年後である。これによって北星は女学校を中心にその基盤を堅固なものとし、一方、幼稚園についてはロース幼稚園のみにしてこれを強化し静修女学校の寄宿制は廃止して縮小した。これらは全体として札幌圏内のキリスト教教育事業の安定を目論んだミッションボードの方策であったが、それはロースにとって苦境の始まりでもあった。

“Ich, diene” (私は仕える) をモットーにロースは質素な生活に耐え、女学校と幼稚園の他に数カ所の日曜学校や青年向けの英語クラスを開設する等、精力的に働き続けた。しかし、文学や芸術を愛したその宣教師と教育者として約 30 年の営みは 1914(大正 3)年、病死によって突如終止符が打たれたのである。

#### (4) フレーベル主義教育の展開

さてこの幼稚園も、ロースとかねて親密なミリケンから援助を受けてスタートした。開設と同時に女子学院卒業生でかつてのロースの教え子大久保たまが、続いて日野だいや永井愛等が着任した。大久保は 12 歳から 20 歳頃まで在学し、とりわけミリケンから保育内容や方法の授業を受けたのである。

大久保が 1909(明治 42)年当時からのこの幼稚園で使用した楽譜ノートによれば、自然や四季、小動物、仕事や生活、父母、兄弟や友達、式、行事や祭り、指遊び等、見近かな歌曲の他、挨拶、讚美歌、英語の歌、軍艦や小隊、軍隊ごっこ、飛行機等の歌が盛り込まれている。これら和洋的内容的な混淆は文部省編『幼稚園唱歌集』(1887、明治 20)や『幼稚園唱歌』(1901、明治 34)、ハウの『幼稚園唱歌』(1892、明治 25)、『幼稚園唱歌続編』(1896、明治 29)などから選ばれたものもあるが、ミリケンから直に教わった英語の歌もあろうと考えられる。上記のハウの歌集にある“Gift Songs”(恩物の歌)として Ball(手鞠)や Cube(立法形)の歌である「われ球をもてり 立法形とことかはり<sup>(13)</sup>」や指遊びの歌等、明らかにフレーベルの保育内容から作られたものもある。

興味深いのは大久保の楽譜ノートにはフレーベルの遊戯歌から作詞し

たと考えられる「第一恩物の歌」が載っていることである。それは、「テニテニオクラン ワレラガマリオ アカイロミカンイロキイロニミドリ アヤヤムラサキ、タエズマワルヨ アナウルワシヤ アナオモシローヤ」という軽快な曲がつけられている<sup>(15)</sup>。また、恩物でいえば、ロース幼稚園の卒業生石島三郎は、「幼稚園の積み木あそびをしたりする机」が目に浮かぶと回想している。フレーベルの積み木、即ち恩物は初期には碁盤の目のような線引の机の上で展開していたから、石島の回想はロース幼稚園でも当初この保育が実施されていたことの証言である。

J.K.U. の調査では明治末期にその傘下のキリスト教幼稚園がすでに約 100 園が設立されており、ロース幼稚園も他園の保育内容や教材の影響を受けたと考えられる<sup>(16)</sup>。

この幼稚園は 1916 (大正 5)、ロースに代わってマクロリー (Carry Mcrory) が園長に就いた。このマクロリーは J.K.U. の会員であったためその年報中にロース幼稚園の報告が散見できる。1925 (大正 14) 年の報告によれば園児は 80 名、園長以下 2 名の教師が在職している。この頃、ロース幼稚園は全国的な繋がりで一層水準を上げ、併せて J.K.U. で研究されたものの影響も充分受けてフレーベル主義の保育観や内容、方法を展開したと考えられる。

この頃ロース幼稚園では、ハウ (E.L. Hawe) 代表、幼稚園遊戯歌委員会発行の“Kindergarten Songs and Games”『幼稚園の遊戯歌』(1921、大正 10) が使用されていた。これには総数 44 曲が盛られ、そのうち讚美歌 3 曲とクリスマス、イースター等の行事歌、ゲームやダンスソングなどが含まれている。すでにこの歌集には明治期の恩物の歌はなく、米国製のリズムカルな曲に変わっている。なかにはフレーベル主義教育批判の旗手、ヒル (Patty Hill) 発行の歌集からの引用も見受けられる (No8、20)。

## II. A・L・ハウによる フレーベル主義教育の導入

ハウが1889(明治22)年に神戸に頌栄保母伝習所と付属の幼稚園を設立した当時、生徒や幼児に使用する教材に乏しく、このことがハウをして種々の教科書や保育書を編集する契機となった。

彼女の著作出版物を大別すると、まず第一にこれら実用教材を目的とした文献、第二に『人之教育』等フレーベルの著作の翻訳本、第三には自身の教育論や宗教についての著作、そして第四はその他、米国の家族、知人、卒業生あての書簡、各教育雑誌やJ.K.U.報告、ミッション・ニュースへの寄稿文、幼稚園大会での挨拶の記録等である。

これらの著作は教材であり、ハウ自身の教育観が織り込まれた研究書でもあるという相互的な性格をもっていた。またこの活動がフレーベル主義教育に関する種々の講演や教育活動、研究運動への貢献につながった。ここではハウのフレーベル主義教育導入の特徴に焦点をあわせ、幾つかの文献を考察してみたい。

### (1)『母の遊戯歌及育児歌』とその背景

まずハウの最初の翻訳書、『母の遊戯及育児歌』上、下(1895、明治28)を取り上げたい。これは、フレーベルの原著、Mutter-und Kose-Lieder(『母の歌と愛撫の歌』1844)に含む教育精神と遊戯歌の實際を保母伝習所の教科書にする目的で訳されたものである。しかし、これは単なる訳本ではなく、その前後の解説、翻訳部分の選択、挿絵などの装丁に見られるように、ハウ独自のフレーベル観が強く表出された書でもある。ハウにとってこの書は後の『人之教育』とともに、フレーベル理解にとって、あるいは教育者の必読文献として何にも代え難いものだった。つまり日本人に先駆けたその翻訳の意図、「フレーベル氏の感憤、励精、経験の結果なる幾多の珍宝を蔵し、今や文明諸国に於て將に教育上の一大勢力たらんとし、又將に日本にも行はれんとする此の奇書の研究に励精し、其深奥幽玄なる岩窟を穿ち以て其蔵する所の驚歎すべき教義を発掘せんことを勉めざる可らず、蓋し其得る所は必ず其勞に酬ひて餘あるべし<sup>(17)</sup>」には彼女の意気込みが感得できる。



確かにこの著はフレーベルが『生命革新の訴え』等で述べるように、人間教育の基本と出発は母親と家庭生活にあるとの確信が基底となっている。

これは、ロマン主義的な手法による挿絵と曲がつけられた7首の歌、50首の遊び、1首の結び歌とそれぞれの解説からなっており、神への信頼、他者への理解と人格関係、愛、希望、奉仕など、人間関係をめぐる自然と生活の環境を映し出している。まだ外界の汚濁にまみれていない乳幼児期に、母によって宇宙の永遠の法則とそこに内在する神性の自覚を促すよう、家庭の日常生活の状況を順序よく並べ、謳い、遊ぶことで感覚的認識を育くむことを目指したものである。

フレーベルのこの原著には二つのタイトルがあって、最初の本扉には Mutter-und Kose-Lieder (『母の歌と愛撫の歌』) と記されている。実はハウの訳本『母の遊戯と育児歌』は二番目の扉にある、Mutter= Spiel und Koselieder の訳なのである。この訳はスーザン・E・ブローウ (Suzan E. Blow) の著、“THE SONGS AND MUSIC of Friedrich Froebel’s Mother Play” (Mutter und Kose-Lieder) 等に見られるように、Mother Play・・・と訳されており、当時の米国ではこの第二の扉のタイトルの使用が一般的であった。<sup>(18)</sup>

ハウのこの翻訳本の原本は、前書きにドイツ語版の序としてランゲ (Wichard Lange) が、また英訳版の序にピーボディ (Elizabeth Peabody) の名があることから、この二人の書であろうと推察される。<sup>(19)</sup>

逆上ると米国ではドイツ人のクリーゲ (Matilda H. Kriege) の著、“The Child, its Nature and Relations” (1872) の第6章、第7章の中に、“Froebel’s Mother Cosseting Songs” が含まれている。これはマーレンホルツ=ビューローの“Das Kind und sein Wesen”<sup>(20)</sup>等を基にして書かれ、原著の概略を伝えている。だがこれらの書名が“Mutter= und Koselieder”『母の歌と愛撫の歌』というように原著に忠実であり、後の“Mother Play”『母の遊戯』に当たる用語は見当たらない点は興味深い。

ブローウの前掲書にある“Mother Play”は、F. ウンケル (Friedrich Unkel) の版画と独語の歌の掲載はあってもフレーベルの詩(歌)の忠実な訳ではない。また、幼児の「想像力の発達」に相応しく、原著の曲も一部新しく編曲されている。それは自ら述べるように、「フレーベルの理

念を忠実に詩の形式に投じるべく試みられたもの」で幼児が歌い易い、しかも当代評判の高い詩とフレーベルの曲中で「有能な評論家より常々批判を浴びてきた」ものを米国の新曲に入れ替えたのである<sup>(21)</sup>。すなわちこれはフレーベルの『母の歌と愛撫の歌』を基にしてプロウが独自に脚色した子供の遊戯歌である。

それに比べてハウの邦訳は完全に忠実とは言えないまでも、歌数、内容についてはほぼ原著通りである。ただし、編集上の特徴として各歌のフレーベル解説が下巻に集約され、翻訳文が毛筆の文語体で表現されている点などがある。しかし最大の相違は、圧巻である原画を当時の日本人の風俗と日本の自然や社会に置換して描画され、フレーベルの楽譜は非実用的との理由で削除されていることにある。だが、翻って考えると日本画の挿入を通じて、日本人の感覚に訴えることを第一義的に配慮したハウの洞察や心意気が感得できるし、その日本の絵自体がユニークで目を見張るものがあるという点であろう<sup>(22)</sup>。また内容の編集についても次のような変更がある。例えばハウ訳本の内扉には次の句が掲げられている。

小児の遊戯にも往々深意を含む シルレル  
天国に居る者は此の如き者なり 耶蘇基督

上段の語句はフレーベル著の表紙にある“Das hoher Sinn liegt oft im kind'schen Spiel”のを訳と考えるが、下段のものはフレーベルの原著にはない。この挿入にハウのフレーベルやシラーと聖書を結ぶ思想を読み取ることができる。また、原著にある「表紙の図の説明」文中の「ドイツ人の母親」、「自己の高い天職を自覚し、それに全く没頭しているドイツ人の母親」、「ドイツの人間教育」、「ドイツの父親の心」等、「ドイツ」と言う表現をハウは一切削除している。これは表紙を日本の絵に変えたことと関係があるだろうし、フレーベルの教育は万国共通の人間教育であるとのハウの信念が窺える。そして何よりもこの芸術的な、日本的装丁のハウ編著は明治、大正、昭和にかけて四版も重ねたという事実、この書の評価と浸透を窺うことができる。

だがその後、時代の変化やより原著に忠実であることが期待され、J.K. U. 委員のアルウィン (Sophia Arabella Arwin) やクック (Margaret M. Cook) の要請もあって、1934 (昭和9) 年、茅野蕭々が初めて書名を正

確に『母の歌と愛撫の歌』と訳し、内容や構成も原著に忠実に沿ったものを出版した。その後荘司雅子の1976年刊の翻訳書もこの書名を継いでいる。

## (2)『フレーベル氏人之教育』の翻訳

次に、1909（明治42）年ハウ訳のフレーベル主著、“Menschen Erziehung”『フレーベル氏人之教育』について見てみたい。これに関してハウは既に1898（明治31）年に毛筆三巻本の翻訳書『人間ノ教育』、副題として「頌栄幼稚園保姆傳習所生用ノ為ニ譯述ス」を著していた。この時は「写本として年々生徒用に供」するのみで刊行はされていない。

米国では、1886年にJ. ジャーヴィス (J. Jarvis) がこの著を最初に英訳し、次いで翌年ヘイルマン (William N. Hailman) が翻訳したが、ハウはこのヘイルマンの英訳を基に同志社大学教授原田助等の校閲をへて、『フレーベル人之教育』を出版したのである。次いで1924（大正14）年には改訂版『人の教育』が刊行されている。

ハウの最初の毛筆翻訳本が出された当時、我が国では、すでに東京女子師範付属幼稚園の開園から22年を経ており、日本人によるフレーベル教育の文献紹介以来長い歳月を経へていた。にもかかわらずハウ訳が最初であって我が国ではまだフレーベルのこの著は翻訳されて来なかった。

それとの対比でハウのいち速い翻訳導入は、彼女がフレーベル教育の真髄をこの著書に見ていた証左である。事実、彼女はこの書が教育哲学のみならず、靈性と教育の実際を含むがゆえに、「教育上の新生命」を生み出すものと確信している<sup>(24)</sup>のである。これが宣教師ハウと日本人のスピリットの相違であろうと考える。またハウは本文に先立って、「原著者小伝」を記し、フレーベルの生涯と教育活動を簡潔に解説している。これによって『人の教育』の背景を知らしめ、内容理解への一助としている。ただこの中には当時の米国の研究段階を示す記述も散見できる。

それは、例えばキンダーガルテン禁令の原因などである。それは当局がフレーベルを甥の「社会主義者カール一味」との嫌疑によるもの、あるいは、「宗教家の為にあらゆる嘲罵、反対を蒙った<sup>(25)</sup>」ため、などと解説している点である。前者については、単に当局の表面的な理由で、その実はフレーベルの教育思想や活動自体を危険視しての施策であり、後者

は自由教会との繋がりが問題にされたというのが現在の研究の到達点である。これについてはアメリカのフレーベル研究者の W・H・ブレークも『フレーベル傳』で甥のカールが叔父の幼稚園事業に妨害を与えるために「幼稚園は社会主義的、無神論的教育場であるという論を書いて出版した」と記述しており、当時は禁令が共通してカールに起因すると考えられていたことが分かる。

さらに興味深いのは、ハウが米国の幼稚園勤務中に受け取ったフレーベルの妻、ルイゼ (Louise Fröbel) からの書簡 (これは 1883 年 8 月 10 日付、ハンブルク発信) を独語と邦訳の両方をのせている事にある。そこでルイゼは、フレーベルが米国での幼稚園の成功を確信していたこと、彼は米国への移住を熱望していた点を書き記している。これは事実フレーベル自身が「1836 年は生命の革新を要求する」の論文の中でアメリカ移住について明言している通りである。彼は「移住は精神力と身体力を身につけ、また健全な肉体と人間の最も深い内面から、神と一体となった生命や自我力の、さらにまた努力するより高い生命のまだまどろんでいる萌芽を、真に自覚し滋養与えるからである。」<sup>(27)</sup>と言っている。そしてその移住先として彼はアメリカをあげ、そこは「自由な広大な根源的な自然は、自己を発見し、自己を認識させる広大なヨーロッパやドイツの人間精神を思う存分発展させるであろう」<sup>(28)</sup>と述べている。当時ハウ自身このようなルイゼからの書簡によってフレーベル主義教育を実践する確信と意欲が鼓舞されたであろうと推察される。

『人の教育』の他主なハウ翻訳には、ウィギン・スミスの『幼稚園原理と実習』(1917 大正 6)がある。これはサンフランシスコ幼稚園協会長を務めたケート・ダグラス・ウィギン (K.D. Wiggin) と妹のノラ・スミス (N. Smith) による、“Kindergarten Principales and Practice” (1896) の訳である。フレーベル思想、理論とその教育史、哲学史的背景から説き起こした浩瀚な労作で、多分これはハウ自身の教科書的存在でもあったと推察される。ハウは伝習所でこの翻訳書を教科書として使用していた<sup>(29)</sup>と言う。

### (3)『保育学の初歩』と恩物理解

第三には、ハウ自身の著作、または彼女の講演記録からフレーベル教

育論を見てみたい。それにはまず、初期の出版物に属する 1893(明治 26)年の『保育学初歩』を取り上げたい。

この著は「頌栄幼稚園保母傳習所生徒のために時間の節約を図らん」<sup>(30)</sup>のために書かれたフレーベル恩物方法論の解説書であり、伝習所での日常の授業実践やこの著作出版の 2 年前に行った京都市保育会主催の講習会での恩物使用法の講義に裏打ちされた出版物でもある。ここでハウは恩物の教育について真っ先に、「此の事業の原理を通曉せざるべからず徒に形式の模倣を是れ事とするときは僅に凋衰の余生を延き得んのみ」<sup>(31)</sup>として、フレーベルの原理を「透徹理解」するように求めている。それ故に順を追っての恩物の説明内容には、フレーベル教育原理論が詳しく記されている。

例えば第三恩物の八個の小立方体では、フレーベルの教育法則の最重要なものとして『人間の教育』から理論を援用して「既知より未知に進むべし」と説明する。その線に沿って段階的に幼児の環境世界に入る鍵として恩物が使用されると言うのである。これと同様に第七恩物についても具体から抽象、単純から複雑、既知から未知、各恩物のつながり、子供の要求との一致というフレーベル的な秩序を説明している。第五恩物は 27 個の小立方体であるが、これを用いて創造的に作業することにより、フレーベルのいう生命の合一や全世界の事物相互の関連を幼少期より知らしめることにあると言う。全体として恩物の使用によって世界が幾多の国々の小部分として認識し、他者に対する義務と相互関係、他国民の勤勉労作を見て進歩の精神を鼓舞するための道筋を準備するものであると指摘している。そのためにこそ恩物は必要であると言う。

真の学校とは新事実や夥多の事実や方法を教授することではなく、万物に存在する活ける統一を教えることにある。そこでハウはマーレンホルツ＝ビューロー夫人の「フレーベル氏の教育法はニュートン氏の重力の法則の如く今後益々明確に世に受容せらるるに至るべし」<sup>(32)</sup>という言葉をあげる。つまりこの作業を通じて後の人生の行路に有用な発端を授けること、その際、独力、工夫、自分の考えに従うことこそフレーベルの主旨であると解くのである。

一方彼女は、フレーベルの物質界の反対相関の法則が幼児の教育に適用し得ること、もって天然、人間、神との繋がりを覚えさせようとした

ことを取り上げている。これはフレーベルの言う、一般的なものを特殊化し、特殊なものを一般化し、外的なものを内面化し、内面的なものを外化し、有限なものを無限化し、無限なものを有限の立場から考察して両者を均衡化し、生命の中に実現するという、対立物の弁証的な統一の教育公式<sup>(33)</sup>を指していると考えられる。

さて、20 恩物のうち最初の 11 恩物は形、数、色、方向の観念を、後の 9 恩物はその前の抽象的な観念を実物によって表現して印象を深めるものであると言う。

全体の結びとしてハウはペイン (J. Payne) の言葉を引きながら、フレーベルが幼稚園を設立したのは子供の自発的な活動性—遊戯による教育を第一の眼目としたこと、と同時に子ども集団において秩序と静粛の法則を重んじ、相愛し相助け己の分を善く尽くす生活がいかに楽しいか、などの幼稚園生活の幸福感について述べている。

ハウが以上のように保育学の初歩的段階にまず恩物を取り上げたことは、彼女が熱心な「フレーベリアン」(フレーベル主義者)の線上に位置することを示している。しかし、その説明が用法に拘泥するのではなく、徹底してフレーベルの教育思想や教育理論(もちろん方法を含む)から説明している所に特徴がある。すなわち『保育学初歩』がフレーベルの恩物を対象にしつつ、これを単に方法論に終わらせず、その形式の内奥にある思想に焦点を合わせたところに、ハウが明治 20 年代には極めて稀な真のフレーベルに忠実な教育家であったことを裏付けている。なお付録に『フレーベル氏小伝』と『有名なる保母の事蹟』を記しているが、これらは保育に貢献のあった欧米婦人達の教育的貢献をハウの視点によって論じたものである。

#### (4)「フレーベリアン」の紹介

さてこの『保育学初歩附録第二』としてハウが記す「有名なる保母の事蹟」は特に注目値する。以下にみる日本にはそれまで紹介されていない女性をも含みつつ、フレーベル主義教育の最も熱心な後継者や導入者、及び研究者名と足跡が記されているからである。彼女達を通じて明治 20 年代の初めから半ばにハウが寄り所にしてきたフレーベル主義教育の理解をも窺い知れる。以下はハウによる呼称である。

- (1)フォン・ブロー男爵夫人 (2)シュラーデル夫人 (3)ピーボデー夫人  
(4)クラウス夫人 (5)ブロー女史 (6)ショー夫人 (7)ハリソン女史

ハウによればマーレンホルツ＝ビューローは、直接フレーベルからその教育論を伝授され、以来あらゆる困難を押してフレーベル教育の内外への普及に努めた夫人なのである。「吾人も亦自ら発憤興起以て此事業のために全力を盡さんと志を励まさざるを得ず<sup>(34)</sup>」と、ハウは彼女を称賛している。一方、フレーベルの姪の娘で1893年、ベルリンにペスタロッター・フレーベルハウス（Pestalozzi＝Fröbel＝Haus）を設立したヘンリエッテ・シュラーダー＝ブライマン（Henristte Schrader＝Breymann）については（ハウは「シュラーデル夫人」と呼ぶ）、おそらくハウがこの講義で最初に日本に紹介したと考えられる。

ハウはここでドイツのフレーベル運動を担う代表的な上記二夫人がフレーベルとの関係、教育運動の在り方、保育内容や方法上で対立や確執があるのに通じており、それでもなおこの両者の役割を高く評価している。

彼女によれば、ブライマンの教育の「大目的ハ母たり齋家者たるべき女子を養成し且つ彼等貧民に對する各自の責任を會得せしめんとするに在りき<sup>(35)</sup>」とする。実際1873年に、ペスタロッター・フレーベルハウスを設立したブライマンはキンダーガルテンの恩物や折り紙、その他の作業具の一方的教え込み等、その硬直し、形式化した教育を批判し、フレーベルの根源的思想は「生（命）の合一」であるとしてこの実践化に着手した。それは家庭や農園での作業を素材として、「生活を通じて生活への教育<sup>(36)</sup>」を唱導し、子供の発達を組織的に進める実践であった。そこではフレーベルの「生命（Leben）の意味は「生活」の日常に読み換えられるという矮少化も否めないが、ペスタロッター的な「居間の教育」（WohnzimmerErziehung）による極めて身近かで実用的な課題で精神や感情を陶冶し、「人間性の改革<sup>(37)</sup>」を目指す教育構想を展開したのである。

ハウは、この具体的な保育実践例をとって、家庭的感情を高めるために年長と年少児との相互関係や助け合い、音楽の稽古、園庭や家畜小屋の作業等を紹介している。また保母養成に際して、「児童教育に従事せんとする女子ハ先づ自ら人生に関して正確なる見識を有し高下大小に論なく凡て人間の義務を能く理解し之を貴重せんことを要す<sup>(38)</sup>」等の教育訓を

引き出している。

このことからハウのフレーベル理解や保育実践は、このペスタロッチー・フレーベルハウスとプライマンの「子供に生きる」実践を範としていたに相違ない。

### (5) 道徳教育の講義

さらにハウのフレーベル教育観を知るうえで欠かせないのは 1903 (明治 36) 年の『保育法講義録』である。これは私立岡山県教育会の夏期講習会での講演記録であるが、長年の教育実践によるハウの道徳教育についての所論と言えよう。

この第一講の中心はフレーベルの今日的評価にかかわる内容である。そこではフレーベルは「単に幼稚園を設置したに止まらず、一般教育事業、母親の子育てへの感化、教育書の出版、幼児教育と各教育段階の連合等の主張による功績」者であり、「人間は最幼少の時に於て、善美なる教育を施す」事を解いた先覚者としてのフレーベル像が展開されている<sup>(39)</sup>。この「善美」なる道徳教育観がこの講義全体を貫ぬいている。

第二講は米国における幼稚園の歴史と現況についてである。

ピーボディ、クラウス、ブローなどの「フレーベリアン」をへて、シカゴの幼稚園事情やハウが師事したパットナム (Alice H. Putnam) の教育業績について述べられている。注目すべきはパットナム達が普及させた保母養成機関が全米で 30 か所以上にのぼり、これらは 2 年から 4 年の修業年限で、学科目は教育(論)、恩物、手芸、保育、理科、美術、体操、音楽、フレーベル氏の原理などが展開されている。興味深いのは、米国の一般世論は小学校よりも幼稚園の方が「位地が高貴」と考えており、幼稚園教育は一国の文明を進歩させる基礎、という社会的な認識について報告している点である<sup>(40)</sup>。

第三講義では『母之本』を取り上げているが、これは前掲の『母の歌と愛撫の歌』についてである。ここでハウは子供の教育が母と子の遊びに始まるという遊びの様相を洞察したフレーベル教育論を紹介している。

以上の前提の下に、ハウ自身の教育観とフレーベル理論を併わせての遊戯方法や自然界の認識を第四から九までの講義の中で展開していく。

第十、十一講は総論で幼稚園の規則と秩序、自由、道徳について語る。



その中核には「掟に従ふ真の自由」<sup>(41)</sup>、というハウの主張がある。ここでは実際に観察した無秩序の幼稚園児の生活、フレーベル抜きに雑多な玩具による「自由的恩物」使用法を厳しく批判している。子供が自動的、自発的に規則に従うのが理想的幼稚園であると言う。フレーベルの恩物も簡単から複雑へ秩序立てられおり、これに沿っての使用は自由なのである。つまり課題から自由な工夫へ、これがフレーベル理論の真髄であると解く。このような秩序、美、勤勉など、幼稚園教育を巡る道徳教育論こそフレーベル主義教育者ハウの独自性であると考えられる。

大正時代に入ってから保母伝習所の卒業生への告別の辞には以下に要約するような激励の言葉がちりばめられている。

婦人の「信仰心、服従心」こそが子供の魂を喚起するので、高尚な人格者たらんと努めること。自己への信頼、独立心の実行と個人の内部に充滿する自由な活動、すなわち誠心誠意外部に発露する精神的活動を開始すること。世界の思想界の新学説の研究とともに、事実には乏しい流行は追わず常に静肅であること。世に捨てられた境遇の人を幸福ならしむこと。自己の任務は天来の特典一恩寵と考え、自己の最善を尽くすこと。<sup>(42)</sup>」などである。

また、翌2年後の卒業生への告別の辞では次のように述べている。

「成功、権力一功名心が不幸をもたらし、徳を侵蝕する。逆に希望は幻像、勇氣、確乎不拔、忍耐、勝利を生む。幼児教育者は児童の神性<sup>(43)</sup>を日本に來たらず媒介者としての使命を自覚すること。」

総じて言えばハウはフレーベルに関する教育の実際と理論の導入者であるのみならず、極めて深い洞察と強い信念をもつ研究者でもあったと言える。それは、以上に見たように、その道徳、品性、人格、自由と規律、自己の使命についてなど、道徳教育について独自の論を展開したところにあると考える。

### III. J.K.U. のフレーベル教育の導入

#### (1) J.K.U. の発足

そのハウ達、主に日本で保育活動に携わる婦人宣教師によって1906(明治39)年に Japan Kindergarten Union(日本幼稚園連盟)が発

足した。東京保母伝習所のロールマン (E.L. Rolman) が提案し、ハウが初代会長であった。この連盟は会誌として、Annual Report of the Japan Kindergarten Union (J.K.U. 年報) を発刊したが、それによって 1907 年から 1939 (昭和 14) 年までの連盟の活動状況、国内外の研究内容、論文、幼稚園や保育者養成の実態等について詳細に知ることができる。

その第一巻 (1907-1910) によれば、発足当時の規約、役員名等は以下の通り。まずこの J.K.U. の活動目的は第 2 条に、「幼児ための仕事を効果的に進めるために在日外国人の幼稚園教員が相互に相談し、協力することに<sup>(44)</sup>ある」としている。さらに第 3 条はこの会の事業は以下の 4 点であるとされている。

1) 幼稚園の教育内容、諸外国の幼稚園の実情把握 2) I.K.U. との関係の確立 3) 年報の発行 4) 情報 配布 (1, 1907 P 26)

2) の I.K.U. (International Kindergarten Union 国際幼稚園連盟) には J.K.U. 設立の翌年に加盟を果たしている。発足当初の会員数は下記の役員を含めて 20 名、また準会員は 7 名で、その殆どがアメリカンボードなど超教派の福音主義教会から派遣された婦人宣教師であった。

会則 5 条は役員規定で、「認可された教員養成校卒業の会員で、かつ日本で少なくとも 1 年以上幼稚園勤務を経験した者の中から選出される」となっている。であるから役員は単に宣教師の資格のみならず幼児教育の専門家でなければならなかった。そのような基準で選出された創立当初の役員は以下の通りであった。

会長 A.L. ハウ (神戸) 副会長 E.L. ロールマン (東京) 書記、会計 M.M. クック (広島) 通信係 I.L. タッカー (東京) 委員 A.L. ハウ (神戸)、E.L. ロールマン (東京)、M.M. クック (広島)

I.L. タッカー (東京)、D.W. ラーネッド (京都)、R.A. タムソン (神戸)

会則 12 条によると、会員の資格として「幼稚園教員など、公的に幼稚園などに<sup>(45)</sup>連なっている者は会員になることができる」としている。

さて、ハウ会長は就任挨拶のなかで、上記の規約にある事業とは別に J.K.U. に期待されていることとして、1. 会員の幼稚園や養成機関への関心、2. 相互の面識、3. 日本の同僚とその仕事の認識、4. 日本の一般的な教育制度の把握、5. 海外の幼稚園業務の研究、をあげている。

1. については our own special Kindergartens の意味が会員のキリ

スト教幼稚園を指すと推察されるが、極めて婉曲な表現となっている。ところで J.K.U. の規約の活動目的や会長挨拶には、第一義的には宣教やキリスト教伝道という言葉は見当たらない。

確かに年報のなかには、「日本伝道のために我々は何をしているか」(1909)、「福音伝道の力としての幼稚園」(1915)、「伝道の機関としての幼稚園」(1921)など、宣教師としての自らの使命を確認するものもある。だが連盟の関心は、上記の 1 から 5 に見られるように日本の教育事情、海外の幼児教育の動向の把握 (I.K.U. への加盟)、フレーベル主義理論の一層深い理解、そしてその理念の啓蒙と研究の活動に主に集約されていると言えよう。

次に年報で発表されたフレーベル主義教育論を見てみたい。

## (2) J.K.U. を取りまく新教育の流れ

婦人宣教師達が J.K.U. を結成した当時、新教育の潮流は日本にもひたひたと押し寄せて来ていた。

1900 年、既にスエーデンのエレン・ケイ (Ellen Key) が 20 世紀は児童の世紀であると高唱し、自由な発達、活動は子どもの権利であると唱えたのである。重要なのはその著で彼女は、幼稚園のシステムが子どもの個性伸長を阻んでいると痛烈に批判し、これからの解放を指摘している点である。<sup>(46)</sup>

アメリカでは 1885 年に米国教育連盟幼稚園部会が発足したが、会長のヘイルマンはその開会演説で恩物を目的化した教育をフレーベル精神の逸脱、と痛烈に批判し、子供の発達法則の研究を第一義的に提案している。<sup>(47)</sup> ハウはこのヘイルマン編の『人間の教育』を邦訳する目的がフレーベルの教育精神の真髄を広めることにあったことは先に述べた通りである。1890 年にはその会のブライアン (Anna Bray) 、続いてフィーロック (Lucy Wheelock) やヒル (Patty Hill) も幼稚園教育における恩物の象徴主義や順序に従う形式的な指導法に対して非難を加えている。<sup>(48)</sup>

しかしプロウ達、いわゆるフレーベリアンに対して最も厳しく批判したのは改革的進歩主義者とされる心理学者や教育学者のグループであった。

それはクラーク大学総長ホール (Stanley Hall)、シカゴ大学教育学部

長デューイ (John Dewey)、同大学教授パーカー (Francis Parker)、コロンビア大学教授キルパトリック (William Kilpatrick) らであり、彼らは学問的な裏付けをもって徹底的な論評を展開したのであった。

このホールのフレーベル観を日本児童研究会主幹の高島平三郎が「フレーベル氏の九原則を評す」<sup>(49)</sup>の中で紹介した。そこでホールは、フレーベルが「児童ハ人類種族ノ発達史ヲ反復」<sup>(49)</sup>することをヘッケル (E. Heckel) の百年も前に唱えたことを評価し、この Theory Recapitulation (約節の原理) は発生心理学の基礎にあることやキンダーガルテンの庭での自然と戸外での健康生活の実践等について彼を積極的に評価している。反面、発達観の欠如や自然を抽象化した遊具とその整然たる配列が形式主義を招いたことを指摘した。そして彼以降に進歩した生理学、児童心理学など、近代科学の成果にたつて幼稚園教育を改良、とりわけ児童の興味と才能の自由な発達に手掛けることこそがフレーベル精神に忠実であると唱えたのである。<sup>(50)</sup>

シカゴ大学に実験学校を付設したデューイも、生産的、創造的な作業を価値ある知識獲得に結合したフレーベルの功績を高く評価しつつ、他方、彼の抽象哲学を強く否定した。<sup>(51)</sup>そしてデューイは実用主義の立場から、児童が興味を抱く協同活動へ導くことで現実社会の歴史的進歩に貢献する教育プログラムを考案した。同じくキルパトリックも論理から演繹された象徴遊具は子供に適合せず、この遊具からの解放が子供の豊かな生活を保障すると痛烈な批判を加えている。<sup>(52)</sup>

ハウは1903 (明治36) 年から1906年までの約2年半、母校シカゴ・フレーベル協会保母養成所々長として招聘されるが、その間彼女はシカゴ大学の冬学期に参加し、上記のような新教育の講習を受けている。

彼女はそこでデューイの自由、自発性、表現、個性重視の新教育運動を学びつつも、次のように逆にフレーベルを推奨している。「だから私もデューイと共に言いたいと思います。全ての公立学校や先生方が、私たちの宣教師団の活動に歩調を合わせる日がきて、全ての隔てがとりのけられる時が来れば幸いだと。いわゆる高等教育がもてはやされ、子供の教育があまり顧みられていない現状に満足できなくなった日にこそ、私たちはフレーベルの偉大さを感じるでしょう。<sup>(53)</sup>

一方、新教育と言え、イタリアではマリア・モンテッソーリ (Maria

Montessori) が 1907 (明治 40) 年にローマ郊外のサンローレンゾの貧民街に「子供の家」を開設した。彼女は医学や障害児教育を研究し、いわゆる「モンテッソーリ教具」を使用した教育実践の展開と教育論、すなわち発達の敏感期—集中現象—正常化の理論を打ち立てた。この理論と実践は俄に脚光を浴び、1910 年には米国に導入されて教育界に波紋を投げかけていた。

他方、すでに日本でも 1913 (大正) 年の京阪神三市連合保育会やフレーベル会主催の研究会においてモンテッソーリ法が紹介されていた。新教育の提唱者河野清丸が丁度この年、『モンテッソーリ教育法と其応用』(1914) を著している。

この日本人の動きと前後して、進取の気性に富むハウは、1913 年 (大正 2) 年の帰米時に、サマースクールに参加してこれを積極的に接收した。その後教具を持参して帰日し、やがて 1914 年の J.K.U. 年報にいち早く、「アメリカにおけるモンテッソーリ・メソッド」を掲載している。ただしハウはこのメソッドについての称賛のみならず、「完全なる自由」が身勝手、不注意、乱雑と混同してはならないこと、自己表現する自由と全く同程度に規律が重要であると釘を刺している。

この他 J.K.U. からは、神戸善隣幼稚園の G. タムソン (Gazelle R. Thomson) が 1914 年にローマの子供の家を訪問している。

### (3) フレーベル主義教育論の理解と導入

さて、日清・日露戦争を経て大正デモクラシーの時代を迎えると、時代の風潮に触発されて新教育運動が勃興するに及んで、J.K.U. の指導者たちがフレーベル教育論をどのように展開していったのかを、次に探りたい。

この連盟所属の会員たちがこの嵐の中で意を新たに、且つ強固にしたものは婦人宣教師としての自己の使命である。その決意のもとにキリスト教的観点からフレーベルを再評価する論述が幾つか表された。名古屋地区部会長のドーソン (Elizabeth Dawson) は、伝道とはキリスト教化することであり、フレーベル教育とは人間をキリスト教的に変革することだと言いつける。<sup>(54)</sup> すなわち「フレーベリアン」の見地に立つ教育は「神との一致」(Unity with God) を目指しており、日本の幼稚園の目標を

これと違ったものにできるのか、と問いかける。端的に言えばフレーベル主義教育とはキリスト教化することであり、伝道もキリスト教化であると言う。そしてフレーベルの言う「永遠の法則の支配」を引用し、キリスト教教育抜きの本当の幼稚園はあり得ないと断言するのである。

ここには形骸化の批判に晒らされているフレーベル主義教育を彼の真髓に照らして指し示し、キリスト教に取り込もうとする意図が窺える。ハウ書簡にも既に「フレーベルの理論を良き手本とする教師が最善のキリスト者たりえましよう<sup>(56)</sup>」と記している。

フレーベルが表す万物に働く神の法則論に J.K.U. のメンバーは一樣にアイデンティティを抱いたようである。

これに関してフレーベル自身の言う教育論を見てみたい。

「キリスト教徒としてわれわれがイエスにみ、人類のみが知っている最高の、最も完全な模範人は、自己の存在、自己の地上への出現、自己の生命の一番のみなもとが何であるかをはっきりと生きいきと自覚した人間であり、永遠の法則の制約を受けて、永遠の法則に従って永遠に生きつづけるもの、永遠に創造しつづけるもの(神)から自ら進んで自発的に現れてきた人間である<sup>(57)</sup>」と。つまりフレーベルのいう教育の任務と目標とは、「永遠の法則に従って自由と自己の決断と自主的な選択をもって主体的に立ち現れるような模像」であり、「自己と他人のための模範になること」に外ならない。J.K.U. のメンバーはためらうことなく、このフレーベルの人間像をクリスチャニティにとって「然り」としたのである。

また、朝の会集 (Morning Circle) や歌 (Songs) の項で、愛国心は軍国主義とは相入れず、戦争と征服ではなく、愛と奉仕を注意深く教える必要を説いている<sup>(58)</sup>。これが第一次世界大戦下での論文であれば、いかに明確にキリスト教平和主義の立場が貫かれているかが知れる。これはハウが頌栄において実践した平和と国際理解教育と一致しており、民族的偏見、国家的猜疑心を捨てた世界同胞主義の主張<sup>(59)</sup>と一致する。

また、先のドーソンは家族生活についてもフレーベルの「部分的全体」(Glied gamzes) (Glied Ganzes? の語) を取り上げ、個々人が全体と結合される必要性を説いている<sup>(60)</sup>。

他方、1919 (大正 8) 年には善隣幼稚園のタムソン、ゴードン (Agnes D. Gordon)、フルトン (Amy S. Fulton) 等は幼稚園の庭 (The Kindergar-

ten gardens) という恰もフレーベルの論文、「幼稚園における子供達の庭」(Die Garten der Kinder im Kindergarten, 1850) を想起させる報告を載せた<sup>(61)</sup>。特にフルトンは園庭での子供の運動、遊び、作業によって、自然愛と知的、精神的成長、なかでも誠実、忍耐、信仰を育む点を指摘している。また各人あるいはグループで畑を耕すことを期待している。上記のフレーベル論文では個々人の畑を共同の畑が取り囲む事で個人の保護、個と全体的一致、一般と特殊なものとの関係の認識、家庭や市民生活への理解を促したものであり、それは、「内面的な道徳的な高揚と強化のための源泉を提供する」<sup>(62)</sup>ための庭なのである。

新教育の潮流のなかで、Report では特に恩物の排除を表現する論文も現れた。グレイ (Grady Gray) は「教材自体が組織的に整頓されて、発展するのではなく、子供の成長に直接関連するものである。それで幼稚園の教材を忘れ、子供の姿をはっきり見て、彼らを援助するため必要なことの全てを知ること」を要請し、さらに「恩物がおかれる順序は子供の必要によってである」<sup>(63)</sup>と指摘する。

一方、日本の子供達は遊びの精神に欠け、子供、個人は家族の概念の中に埋没していると指摘するのはガースト (Gretchen Garst) である。ここではフレーベルの「遊びは人生の最高の段階」などの論を基底にしつつ、教育的な遊びを年齢や発達を追って明らかにしている。その際日本の幼稚園を視野に入れつつ、しかもアメリカ発達心理学を援用して遊び理論の数々を入れて展開している点は注目値する<sup>(64)</sup>。

## ま と め 一 宣教と教育の役割一

J.K.U. はまさしく婦人宣教師の宣教と教育の役割を同心円的に捕らえた活動の場であった。

広島女学院時代に J.K.U. の副会長であり、ランバス女学院時代に会長を二期努めた M. クックは、婦人宣教師の中ではハウとともに理論的なリーダーの存在であった<sup>(65)</sup>。彼女は教育と宣教の関わりについて 1913 (大正 2) 年に次のように述べている。ミッション幼稚園は日本をキリスト教王国とする原動力的存在であり、福音の媒介を目的にする。しかし、同時に真に活動力のある幼稚園でなければ日本国民への「神の大目的へ

の献身」は果たせない。福音的責任以前に教育上の責任があり、この教育活動の責任を負うことが伝道精神の現れである、と。<sup>(66)</sup>

これは教育と伝道の関係を極めて明瞭に述べたものであり、J.K.U. の主流の考え方と捕らえることができる。

クックの上記の論に見るように連盟の幹部たちは概して教育を伝道的手段と短絡しては考えていなかった。むしろフレーベル教育論の深い理解と実践こそがキリスト教化につながると考えていたのである。このことの意味するものは大きい。つまりそれ故にハウ初め多くの宣教師達は当世流行の形式的な恩物教育に傾倒せず、口癖のように「フレーベルの真髄」に返ることの必要を訴えた。それ故にフレーベルの多面的な保育思想や内容を追求し、展開しえたのである。

例えばハウは初期の訳本『母の遊戯と育児歌』から大正期の『フレーベル傳』(1918、大正7)に見るように、一貫して「単にフレーベルの型を鵜呑みにすることなくフレーベルの思想を十分に会得して此事業に当たられんこと」<sup>(67)</sup>を強調する。絶えず人間形成の根本思想の研究を強調しているのである。ハウはプロウやパットナムを最も信頼し、その影響を受けた弟子の一人であったが、フレーベルの基本的な理念を追及した「フレーベリアン」でもあった。このように宣教師達の生きざまに共通していたのが人間の根源的な精神活動を問う姿勢であり、それが容易にフレーベル哲学と結合した要因と考える。

一方、それは J.K.U. の活躍した時代背景とも関連している。彼らの I. K. U. 加盟は世界的な新教育運動の情報や先端の教育・保育理論の接取を可能にした。例えば上記のハウ会長就任挨拶ではカナダでの I. K. U. 大会に触れつつ、幼稚園教育はフレーベルの深い理解、その技術的な方法ではなく基底的な理論 (reasons underlying)<sup>(68)</sup>が必要で、それには心理学、哲学、教育学、科学、文学、芸術の学習に取り掛かるべきことを訴えている。また、彼女達の多くは本国、米国でのフレーベル主義教育論争とアンティフレーベリアンの動きに敏感であって、これらを十分踏まえた上での教育論が年報に表現されているのである。クックは既存の幼稚園は厳しい調査研究の対象とし、フレーベル教育事業の見地に立っての改革の必要性を唱えている。<sup>(69)</sup>

同じ J.K.U. 婦人宣教師であってもハウとクックの教育学バックボア



ンには時代的差異があるのだが、いずれにしても婦人宣教師のフレーベル理論の把握は、キリスト教の伝道精神と表裏一体であったと言える。そのスピリットが幼稚園教育運動の推進力となったことは疑い得ない。

他方、新教育の理論を射程距離に置きつつ、あるいはそれを取り込んだでのフレーベル主義教育の普及活動は、子どもの本性の発達を配慮し、自然と家庭生活に根差す教育を推進する役割を果たしたと言えよう。それは明治政府の性急な欧化政策の落とし子である知識、技術に偏向した教育、つまり教育精神抜き之恩物による手技保育など、いわゆる和魂洋才の教育と対峙していたと言えよう。

J.K.U. の創立当初、キリスト教幼稚園数は17、保母養成校は2校であったのが、1935（昭和10）年にはそれぞれ330園と園児数14,015人、養成校は10校にまで膨れ上がっている。この業績は婦人宣教師の活躍、特にJ.K.U. に結集した彼女達の力の実績そのものである。その教育精神と実践は日本の幼児保育界に伝播されたのみならず、同時にキリスト教精神も見えない形で広がって行ったはずである。

なお、後年の婦人宣教師達、J.K.U. を支え、フレーベル主義教育導入に多大な貢献をなしたキュックリッヒ（Gertrud Kuecklich）やアルウィン、さらに日本人保育者、保育研究者達、例えば和久山キソ、高森富士、甲賀ふじ達、あるいは、野口幽香の二葉幼稚園やタムソンの善隣幼稚園等、キリスト教主義の貧民幼稚園については今後の研究課題としたい。

### [注]

I

- (1) George W. Knox, "The school factor in missionary work; The Presbyterian and Reformed Review"  
Vol.III No.11 1982 P.511
- (2) 小檜山ルイ、『アメリカ婦人宣教師』1992 この著には米国婦人宣教師の海外活動の時代的背景が詳細に記されている。
- (3) A.L.ハウ、山中茂子訳、『A.L.ハウ書簡集』1993 P.133 これは兄宛の1892年1月9日付書簡にあるもので、クラーク博士の宣教師観について記したもの。
- (4) George and Ida Pierson、小池創造・小池栄訳、『使徒はふたりで立つ』1985 P.107

- (5) ミッションボードの書記であった Gillespie が 1886 年 11 月 1 日付で スミスに宛てた書簡。なおここには「落胆するような事が並々ならずある中で、為さねばならぬ一つの仕事を前に推し進めて行く貴女の集中力と熱情に敬服せずにはおられません。……優れて称賛の値するものです。確かに実現できそうであれば奨励されるべきです」とある。
- (6) 「函館新聞」、明治 20 年 2 月 27 日付 実際の開設時は 1 月 15 日 札幌には 1875 (明治 8) 年、北海道開拓を支える婦人の教育を目的とした官立の札幌女学校が設立されたが、翌年には閉鎖されている。
- (7) 北星学園百年史刊行委員会、『北星学園百年史』1990 P.111
- (8) 「北海道毎日新聞」、明治 21 年 8 月 7 日付と同 22 年 8 月 11 日付
- (9) 女子学院史編纂委員会、『女子学院の歴史』1985 P.102-103
- (10) キリスト教保育連盟百年史編纂委員会『日本キリスト教保育百年史』1986 年 P.44
- (11) スミスによるミッションボード日本代表のインブリー宛書簡 1887 年 11 月 23 日付
- (12) Gillespie 宛のローズの書簡 1897 年 12 月 日付不明
- (13) 小林恵子、「スミス女学校 (現・北星学園) 付属幼稚園とローズ幼稚園」『国立音楽大学研究紀要第 22 集』昭和 63 P.295
- (14) A.L. ハウ、『幼稚園唱歌』1901 P.118-120
- (15) 小林恵子、前掲書 P.294
- (16) 近藤治義編、『バラと十字架』1954 P.31

## II

- (17) F. フレーベル、A.L. ハウ訳、『母の遊戯及育児歌』明治 28 P.2
- (18) S. Blow, "THE SONGS AND MUSIC of Friedrich Froebel's Mother Play (Mutter und Kose Lieder)" 1895
- (19) ハウによればこの著は、米国で 1879 年に英訳され、各保母養成所で研究されたと言う。F. フレーベル、ハウ訳『人の教育』大正 14 P.26
- (20) H. Kriege は Marenholz=Bülow, "Das Kind und sein Wesen" と同著 "Die Arbeit und die neue Erziehung" に重要なフレーベル思想あると言う。"The Child, its Nature and Relations", 1872 P.2
- (21) S. Blow、前掲書 Miss Blow's Preface
- (22) 坂田 (幸三郎) が翻訳、絵画、印刷の全体を、翻訳を大和田、柏木、露無、そして絵画の翻案を濱、鈴木各氏の助力を得たと序で述べて

いる。

- (23) 小原国芳・荘司雅子、『フレーベル全集』第五巻 P.279
- (24) F. フレーベル、ハウ訳、『人の教育』大正 14 P.26
- (25) 同上 P.23
- (26) W.H. ブレーク、岩村清四郎訳、A.L. ハウ発行、『フレーベル傳』大正 7 P.145
- (27) 小原国芳・荘司雅子、前掲書 第三巻 P.604
- (28) 同上 P.613
- (29) 高野勝夫、『エ・エル・ハウ女史と頌栄の歩み』平成 1 P.72
- (30) A.L. ハウ、『保育学の初歩』明治 26 『明治保育文献集』第五巻 所収 昭和 52 P.5
- (31) 同上 P.6
- (32) 同上 P.78-79
- (33) F. フレーベル、岩崎次男訳、『人間の教育 1』1966 P.21
- (34) A.L. ハウ、前掲書 P. 297
- (35) 同上 P.308
- (36) “Eine Erziehung durch Leben zum Leben” Schrader = Breymann, Erika Hoffmann, Kleine Pädagogische Texte 5
- (37) “Verbesserung der Menschheit” Pestalizzi-Fröbel-Haus, “Laßt uns unsern Kindern leben” zur Geschichte und Konzeption der Sozialpädagogischen Praxis Teil I 1992 S.91
- (38) A.L. ハウ、前掲書 P.308
- (39) A.L. ハウ、『保育法講義録』明治 36 『明治保育文献集』第九巻 所収 昭和 52 P.11
- (40) 同上 P.14
- (41) 同上 P.49
- (42) A.L. ハウ、『幸福なる可能事』大正 6
- (43) A.L. ハウ、『希望』大正 8

### III

- (44) J.K.U., “First Annual Report of the Kindergarten Union of Japan” 1907 P.26 なおこの年報の抜粋訳は、“Annual Report of the Japan Kindergarten Union” (昭和 60) 日本ライブラリー発行の第 7 巻に収められている。
- (45) J.K.U., 前掲書 P.27

- (46) E. ケイ、小野寺信、百合子訳 『児童の世紀』昭和 54 P.207-208
- (47) 津守真他、『幼稚園の歴史』昭和 40 P.155
- (48) 同上 P.158-162
- (49) S. ホール、高島平三郎訳と解説、「フレーベル氏の九原則を評す」  
『児童研究』(第 18 巻、12.13 号) 『復刻幼児の教育』所収 P.400
- (50) 高島平三郎、前掲書 P.527
- (51) J. デューイ、松野安男訳、『民主主義と教育』(上) 1975 P.99
- (52) W.H.Kilpatrick, “Froebel’s Kindergarten Principles” 1916  
P.195-208
- (53) 頌栄保育学院、『幼児保育の系譜と頌栄』1996 P.106-107
- (54) J.K.U. 前掲書 Eight Annual Report に “A Word warning” を載  
せている 1914 P.6
- (55) J.K.U. 前掲書 Ninth Annual Report 1915 P.1
- (56) A.L. ハウ、山中茂子訳、『A.L. ハウ書簡集』1993 P.28
- (57) F. フレーベル、岩崎次男訳 『人間の教育 I』1966 P.18
- (58) J.K.U., 前掲書 Ninth Annual Report 1915 P.3
- (59) A.L., ハウ、『幸福なる可能事』大正 6 P.44-45
- (60) J.K.L., 前掲書 1915 P.3
- (61) 同上、Thirteenth Annual Report 1919 P.53
- (62) F. フレーベル、岩崎次男訳、『幼児教育論』1972 P.135
- (63) J.K.U., 前掲書 Sixteenth Annual Report 1922 P.22
- (64) J.K.U., 前掲書 Seventeenth Annual Report 1923 P.28-35
- (65) 広島学院百年史刊行委員会、『広島女子学院百年史』1991
- (66) J.K.U., 前掲書 Seventh Annual Report 1913 P.1-4
- (67) W.H., ブレーク、岩村清四郎訳 前掲書 P. 4
- (68) J.K.U., 前掲書 Second Annual Report 1907-1908 P.41
- (69) J.K.U., 前掲書 Seventh Annual Report 1913 P.1